

特集

子どもと水

保育環境としての水

塩崎美穂

水の魅力―保育で大切にされてきた素材―

二〇〇七年の夏、イギリスのペングリーン（ロンドンから北に車で二時間ほどの町）にある保育施設を訪ねました。このペングリーンセンターは、世界中の保育実践者や研究者が訪れる「総合的保育施設」兼「保育者養成・研修機関」であり、今や、福祉や教育に関する国境を越えた共同研究の拠点でもあります。

ペングリーンセンターのナーサリーは、ビーチと呼ばれる広い砂場、緑におおわれた園庭、いつでもくつろげるソファ、泥んこの長靴、洗いたての洗濯物、いつでも使える絵筆や工具、彩り鮮やかなおいしいランチなど、生活臭さのある居場所や物でいっぱいです。そこは、世界中の保育関係者に研究交流の場を提供しながらも、何をおいてもまず目の前の子どもたちの生活世界を支える保育の場として機能しています。



特に印象的だったのは、広い園庭の一角に設置された、流し台をつなげたような水遊び用の大型遊具です（写真参照）。長いステンレスの水路を大量の水がジャージャーと勢いよく流れ、子どもたちがその流れに手を浸しながら、水路に沿って歩いたり、流れに逆らって立ち止ったりして水を確かめています。

水の中を車や電車を走らせている子どももいます。屋内にあるシャワー室の入口には、声をあげながら水浴びをする子どもたちの写真もあり

ました。少し見回せば、ベングリンセンターの保育の中に、水が重要な素材として位置付けられていることがわかります。

でも、なぜ水なのでしょう。水は、子どもが自ら触り、冷たい、温かい、ぬるつとしている、さらつとしている、重い、軽いなどの感触や存在を確かめることができる物体です。しかも、そのまともやり流れを、手や物を使って、簡単に変えることのできる可塑性の高い素材です。砂や絵の具などに混ぜれば、元々の素材（砂や絵の具の硬さ）が変容したりもします。子どもが「自分の力でコントロールできる」という感覚（全能感）を感じられる教材として、水は、いつの時代にも私たちを支えてきてくれたのではないのでしょうか。

また水は、同じように可塑性の高い砂よりも、さらに流動的で形がとらえ難く、蒸発して、色や匂いがわからなくなってしまう場合もあります。水は人

間に、個体としての境目よりも全体との一体感を感じさせやすい素材かもしれません。目も見えず耳も聞こえないヘレンケラーが、流れる水を受けて初めて物に言葉があることを理解したシーンに現れるような、水という素材の興行きについて、今一度、考えてみたいと思います。

水の効能——わが家のひと「マー」

ここで少し、何の変哲もないわが家の出来事について紹介させていただき、水について考える一助にしたいと思います。

先日、小学二年生の次男が父親との将棋に負け、悔しさに突っ伏して泣き崩れ、いっこうに立ち直る兆しが見えないことがありました。私は抱き上げてなだめ、何があったのかを聴き、次の場面へと気持ちをもっていく手助けをしたくなりました。母親の強引さを含んでいるとは思いつつ、子どもが袋小路

に迷い込んだこうしたときには、つい、抱っこしたくなります。もちろん抱き上げた後には、これで良かったのかと私なりに自責の念にかられるわけですが、泣き止んだ子ども本人は、案外ケロっとしていたりします。

ただ、この日の彼は声をかけても、がんとして動かず、さすろうとすると身をよじり、ますます大声で抵抗しました。でもそのうちに私には、こうして悔し泣きするほど大きくなった息子をうれしく思う気持ちや、みんなに自分の悔しさをワアワア言って伝えようとする幼さのある息子へのおいしい気持ちがあふくようにわいてきて、泣いている息子にまじめに対応しようとすればするほど、なんだかおかしくて笑いがこみ上げてきてしまい、どうにもならなくなってしまう。あのとき、そのまま放っておき、私が何もしくとも、きつと彼は自分で区切りをつけて泣き止んだでしょう。でも、私はおかし

さに堪えながら、ひと声かけ、彼の背中を押ししました。「お風呂にでも入ってきたら？」と。

すると、それまで岩のごとく動かなかった彼が、兄が先に入っているお風呂に（精いっぱい怒った足踏みを見せることは忘れませんでした）向かっていきました。困ったときのお風呂頼み。功を奏したようです。このとき私は、どこかで、お風呂にたどり着けば事態は収束する、お風呂ならば彼も向かうだろう、と思っていたように思います。赤ちゃんを抱っこすれば泣き止むことがわかつている程度に、お風呂に行けば彼の気分が変わることを、息子も私も予測していたように思うのです。

果たして彼は、温かい湯気の中に入り、湯船につき、兄と何やら話し始めました。声が聞こえてきます。「……父ちゃんはさ、もう大人なんだよ。だからさ、二年生が負けてもおかしくないよ。またやればいいじゃん」という兄の声に、「……でもさ、

……ぼくさ、勝てると思ったんだよ……。負けちゃったよ」としゃくりあげながら弟が応えています。お風呂から出てきたときは、まだ憂いを帯びながらも、次男の機嫌は八割方回復していました。

さて以上が、お伝えしたかった出来事です。特に珍しいことでもなく、どこの家庭でも多かれ少なかれ、このように、お風呂の効能（水の効能）が感じられることがあるのではないのでしょうか。生活の流れや気分を変える水の威力は、どこか当然のこととして私たちに受け入れられ、誰もが身近な出来事として感じているように思います。

サムシング・グレイトという存在

こうした水の威力について思うとき、私は、作家小川洋子さんの「サムシング・グレイト」という話を思い出します。それはこんな話です。

数学者や科学者は、目に見えない何か偉大なもの

(サムシング・グレイト) に対する謙虚さをもって世界のありさまを追求しており、その思考は次のようになっているというのです。

「三角形の内角の和は一八〇度である。それは人間がそういうふうには仕向けたからでもないし、人間の心が感じるからでもない。人間が生まれる前から、ずうつと世界はそういうふうには作られているんだ。ということは、人間よりもっと偉大な何者か、サムシング・グレイトによって、三角形の内角の和はどんなに小さな三角形も巨大な三角形も、すべて一八〇度になった。だから数学者は、偉大な何者かが世界のあちらこちらに隠したそういう秘密を、洞窟から宝石を掘り返すようにして見つけ出す、それが仕事だ。」

つまり、サムシング・グレイトは私たちの世界に

すでに常に存在しており、それを探るのが数学者や科学者の役割であるということなのです。科学者は何か特別な才能があるから研究をしているのではなく、誰もが日々日常生活の中で享受しているものを認識し、浮かび上がらせる作業をしているにすぎない。相対性理論はアインシュタインが発見しなくても、誰かが何年後かに発見したし、フェルマーの定理もDNAの配列も、いずれ誰かが証明した、知の解明の一部として、科学者個人は匿名的に研究を遂行しているというわけです。サムシング・グレイトの前にひざまずくような心でいる研究者の姿を、大変魅力的なものとして小川さんは紹介しています。

ひらぶたえ
翻つて、モーツアルトの音楽は彼が居なければ生まれず、あるいは、ピカソの絵はピカソにしか描けなかつたと言われるように、芸術家と言われる人の活動には、サムシング・グレイトへの探求とは異なる何かがあるのかもしれませんが。

水という素材について考えるとき、保育や子育てがその双方にまたがっているように、このサムシング・グレイトに属するような日常的感觉を支える部分と、芸術的活動を促す部分の双方があるように私は思っています。

子育てのような日常の実践の中にも、このサムシング・グレイトのようなものが隠されており、たとえば、お風呂の水のような他愛無い物にも何かがある、という風には考えられないでしょうか。選ばれし者が特別に行うのではなく、連続と続く命のつながりの中で、誰もが味わう予兆のような感覚です。お風呂に入れば機嫌が直るとか、そういうささやかなことが日常生活の文脈の中に隠れており、それが保育の中にあるサムシング・グレイト、おもしろさなのかもしれません。なぜ、私は息子の悔し涙を見てどうしようもなくおかしくなってしまったのか。これもまた、人間の不思議、隠された謎のようにも

思えます。私が解き明かさずとも、誰かがたどりつく真理があるのかもしれませんが。

ペングリーンセンターの豊富な水の流れには、人間がその誕生から身にまといつてきた水という素材への信頼を感じます。〇〇二歳の赤ちゃんの保育室内に、砂場と水場が常時設定されている様子に彼らの水に対する強い思いを感じました。衛生面の心配よりも、水を通して表現される芸術的イメージと、それよりも何よりも、わが家のお風呂場にさえあるような水の大きい力が子どもを支えるということへの信頼が、謙虚にもたれているのだと思いました。

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

1. 訪問の詳しい内容については、拙稿「イギリス視察訪問(一)」『幼児の教育』第一〇七卷第六号二〇〇八年六月
- 「イギリス視察訪問(二)」『幼児の教育』第一〇七卷第七号二〇〇八年七月、参照。
2. 小川洋子著『物語の役割』ちくまプリマー新書二〇〇七年、十六頁